

## 第22章 藍住分場における研究 (昭和27年6月～昭和46年6月)

### 第1節 研究の変遷

養蚕の衰微に代って登場した板野郡の野菜栽培も戦争の激化によって中断したが、戦後の食糧危機も回避され、昭和24年の作付統制撤廃とともに各種野菜の栽培が再開された。しかし、当時は野菜の種苗も雑ばくであり、また技術的にも遅れていたため、当時の藍園村を中心に野菜の研究機関を誘致しようとする機運が高まり、これに応じて昭和27年6月に農事試験場藍園蔬菜試験地が設立され、12月1日に落成式が行われた。

昭和46年6月、農業試験場の石井町への移転新築に伴い、吸収合併され、僅か18年6か月の期間であったが、特徴ある研究を行い、徳島県の野菜振興に貢献したばかりでなく、専門誌に数多くの業績を留めている。

開設当初は当地方の特産野菜であったナス、トマトなどの品種比較試験や一代雑種の優良品種の育成を目指して各地から集めた品種や系統間でF1検定を行ったり、当時新資材として登場した生長抑制剤であるMH-30や堆肥鉢の実用化試験なども行っていたが、30年頃から試験も本格化した。まずナス、キュウリなどの早採り栽培にビニールフィルム、ポリエチレンフィルムをトンネル型に被覆して保温し、定植期を早め、収穫期を前進しようとするトンネル栽培の試験が始まり、これと関連して従来露地栽培ではみられなかった落花・奇形果の防止のための2, 4-Dの処理試験を実施し、これらの結果を直ちに現場に普及した。また従来見られなかった畑作除草剤が登場し、タマネギの除草剤として実用性が検討されたのが30年であった。

当時は野菜の品種も少なく、また供給も不安定であったため採種組合を結成し、スイカ、キュウリなどの採種を行い、30年から3年間農協を通じて農家に販売している。

イチゴ「芳玉」の育成が行われたのが昭和31年であった。当時、本県には促成イチゴの栽培は行われていなかったが、今後の新品目として、福羽に代る栽培しやすい品種を目標に育成されたが、トンネルからハウス栽培などの新しく開発された栽培型に利用され、徳島イチゴとして大阪市場を風靡した。

「阿波沢庵」と並んで徳島県の加工野菜の代表はシロウリである。とくに産地が板野郡板野町が中心であったことからシロウリの品種改良が始まり、34年に「阿波みどり」を育成している。また当時県内にはほとんど栽培が行われていなかったが、食生活の変化に対する今後の新しい野菜としてこの年からハナヤサイ、セルリーなどの西洋野菜の試験が開始された。

昭和30年代からはじまったトンネル栽培がしだいに大型化し、内部でも作業ができるようになり、ハウスの形態となったのが昭和35年頃であり、県内でも各地にナス、キュウリ、トマト、ピーマンなどのハウス栽培が開始された。このため当场ではナスのハウス栽培技術を中心にキュウリ、ピーマンなどのハウス栽培品種適応性試験を開始しているが、ハウスの固定化に伴って、連作障害の発生が多くなり、この対策としてのナス、キュウリの接ぎ木試験が行われた。このような連作障害の発生は各地でも問題となり、この対策や近代化、省力化をキャッチフレーズに登場したのがれき耕栽培である。

本場に続いて昭和38年には藍住分場にも施設が完備し、本場との連けいのもとにナス、トマトの栽培法や培養液の濃度および温度管理についての試験を実施した。またこの施設は農業構造改善事業にもとりあげられ、昭和41年には全県下で5 ha以上の施設が建設されたが、疫病などの特定病害の発生が多く完全防除ができなかったことや培養液の濃度管理が煩雑で労力や経費を要すること、また厳寒期に収量があがらなかったことなどから5～6年でこの栽培法は消滅した。

このような施設栽培の動きに対して板野郡板野町、藍住町などでは施設栽培が減少し、加工用のシロウリ、キュウリが急増し、冬どりレタス、トンネル洋ニンジンなども増加のきざしが見え始めていた。しかし、シロウリ、キュウリの増加は連作障害の発生を助長し、この対策として接ぎ木栽培試験を実施した。この結果は顕著であり、病害の回避のみならず、草勢の強化によって著しい増収効果をあげたちまち全地域に普及した。

40年代になると当地域のハウス栽培はナスだけとなったが、鴨島町、市場町などのナスも対象に暖房機を導入した促成栽培の試験と並行して半身萎凋病対策試験を実施した。またイチゴでは久しぶりに早出し用の品種が育成されたので、当地での適応性を検討するとともに芳玉の半促成栽培技術を確立した。これによって従来徳島市場だけを対象としたイチゴ栽培も大阪出荷が行なわれるようになり急激に面積も拡大した。

昭和43年頃になると洋ニンジン、冬どりレタス、カリフラワーなどの産地の動きが活発化したので、栽培型別の適品種の選定、管理法などについての試験を実施して対応した。

昭和46年6月、石井町へ移転した本場園芸科へ引継がれて、18年間の試験研究を終えたが、試験研究成果は現在においても現地で利用され、また現地の技術の基礎技術としてさらに発展しているものもあり、設立に際し期待された役割と責務は十分果たしたと思う。